

平成30年12月27日、課長級職員以上を対象に行われた年末訓示式での市長あいさつです。

年末訓示式 市長あいさつ

今年も一年間、職員の皆様には大変お世話になりました。今日はまず、今年一年間を振り返って、いろいろと感じたことをお話ししたいと思います。

先日、市内の小学校にお邪魔して、子どもたちと給食を食べてきました。その際、子どもたちと懇談する機会を頂いたのですが、児童会の子どもたちから「人をまとめていくにはどうしたらいいか」「児童会の行事に参加する人が少ないが、どうしたら参加者が増えるか」「あいさつ運動しているが、あいさつが返ってこない事があり、困っている」等といった質問を頂いて、驚きました。



エアコンを設置してほしいとか給食をおいしくしてほしいといった、自分のための要望ではなく、学校のために当事者になって活動していて、悩んでいるからこそ出る質問なのです。市役所が市民から頂く御意見は、落ち葉を掃除してほしいとか交通渋滞を何とかしてほしいとか、基本的には要望が多いものです。ところが、子どもたちはすごいことに、問題を解決する当事者側に立っているのです。この訓示式には管理職が出席していますが、皆さんと同じような悩みを子どもたちが持っているのに私は驚き、時代は変わったのだと思いました。

もう一つ、自治会活動等をしている市民の方たちと懇談させて頂いたのですが、「地域の問題を解決するため、様々な奮闘をしたものの、なかなか物事が進まず大変だった」というお話を伺いました。その中で、「物事を頭で考えるのではなく、まずやってみることが大切だ」と言われました。実践して苦労している方々だからこそのお話で、大人も子どもも関係なく、実践している人には言葉の重みがあるものだと感じました。

今年の7月には「みんなで作るまち条例」が施行されました。条例の策定過程で、まちうた（詩）「さかそう ながくて じちのはな」が作られたのですが、その中に「わずらわしいこと多いけど、会話・対話を繰り返す」「やってみることこそ大切」とあります。そして10月の「地域共生社会推進全国サミット」では、長久手市でも、なかなかうまくいかないものの、遠回りしながら、いろいろな事に取り組んでいる経過を全国の方に見ていただきました。

職員の皆さんにとっては、自分たちの事なのでよくわからないだろうと思いますが、長久手市は、地域共生社会の実現に向けて、実はとてもすごいことに取り組んでいるのです。そのことを認識して自信を持っていただきたいと思います。サミットではボランティアの「サミット楽しみ隊」に活躍していただきましたが、先日の振り返りイベントで活動映像を見て皆が感動して、泣いていました。福祉施策課の職員には大変な苦勞をおかけしましたが、最後は市民の皆さんが生き生きと活躍でき、ボランティアの方から市がお礼を言われたのです。

さて、来年は総合計画が完成する年となります。職員の皆さんとともに、計画が目指しているすばらしいまちを一緒に作り上げていきたいと思います。そこで、皆さんに考えていただきたいのですが、今の市役所には縦割りの問題があります。例えば、老人憩いの家の空きスペースで、ボランティアに子どもを預かってもらう事業をしたいと考えても、待機児童は子育て支援課、老人憩いの家は長寿課、ボランティアはつつせがある課と、それぞれの管轄と責任があり、うまく連携が進みません。こういった問題を解決するための方法を皆さんに考えていただきたいのです。

また、最近知り合いが数名自宅で亡くなられているのですが、これから超高齢化社会となると、病院のベッドは満席で入れなくなり、医療や介護の様々な問題があふれ出てきます。そういった現場を見て、職員は心が動かないといけないと思います。困っている市民を見て、心が動き、「どうしたらこの人を救えるのか」「どうしたらこの人を幸せにできるのか」と考えなければいけません。市役所は、公平で平等で、説明責任が求められます。失敗するとすぐ責任問題となります。しかし、今のルールで助けられない人が出たとき、どうやったら解決できるか考えなければいけません。

市役所は、これまではできる限り市民の要求に応じてきましたが、いずれそれができなくなる時代になります。特に医療・介護の問題は、お金だけでは解決できません。地域共生社会で支えるしかありません。職員の皆さんも、なぜできないのか、なぜうまくいかないのかを、一人で抱え込むのではなく、文句で良いので私に話していただきたいと思います。

本日は皆さんにお礼を申し上げたくて集まって頂いたのに、最後までお願いばかりで申し訳ありませんでした。一年間、本当にありがとうございました。来年もよろしく願いいたします。